

福島県におけるクワキジラミ越冬成虫の桑園への飛来時期と 新成虫の脱出時期

誌名	福島県蚕業試験場研究報告
ISSN	03853365
著者	横井, 直人 吉井, 太門
巻/号	22号
掲載ページ	p. 40-42
発行年月	1987年9月

福島県におけるクワキジラミ越冬成虫の 桑園への飛来時期と新成虫の脱出時期

横井直人・吉井太門*

The Period of Flying to the Mulberry Plantation and of the
Dispersion from the Field on the Mulberry Sucker,
Anomoneura mori SCHWARZ in Fukushima

Naoto YOKOI and Tamon YOSHII*

緒 言

クワキジラミは通常、山間地に多いとされてきたが、近年、平野部の桑園にも多発するようになった。福島県内でも被害桑園が年々急増している状況にある。クワキジラミの生態に関しては横山(1929)³⁾、桑山(1971)²⁾らが概説を述べているが、越冬生態についてはほとんど触れられず、今日においても不明な点として残されている。クワキジラミは春先、大挙して桑園に飛来するため、特に越冬場所の確認は本種の防除面からも非常に重要な課題であるといえる。しかしながら、福島県におけるクワキジラミの生態に関する知見は乏しく、発消長も正確な記録がなかった。そこで、本種の越冬生態を究明する手掛りを得るためにも、桑園における発消長を調査しておく必要がある。今回は飛来時期、新成虫の桑園からの離脱時期について調査したので報告する。

調 査 方 法

福島県梁川町堰本地内の一般農家所有桑園内の農道に約10mおきに計6本の支柱を立てた(第1図)。この支柱に武田式粘着板(30×30cm)を2枚張り合わせて、ホッチキスで固定した後に第2図のように高さ1mの位置にはめ込んだ。毎週、定日に粘着板トラップに捕獲されたクワキジラミを数えた。

一方、同時に見取り調査も併用し、粘着トラッ

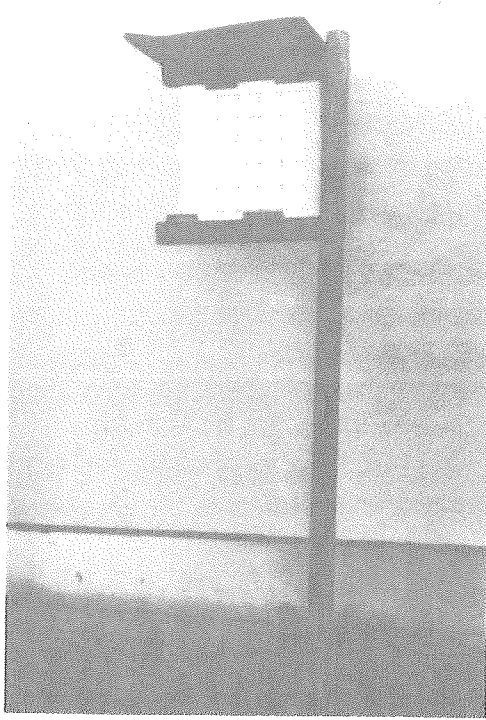
*現在 福島県果樹試験場

プ板の隣の畦にある1株を指定して、その株の最長枝条1本につき寄生したクワキジラミを数えた。



第1図 調査桑園(梁川町)
破線の農道にトラップを設置

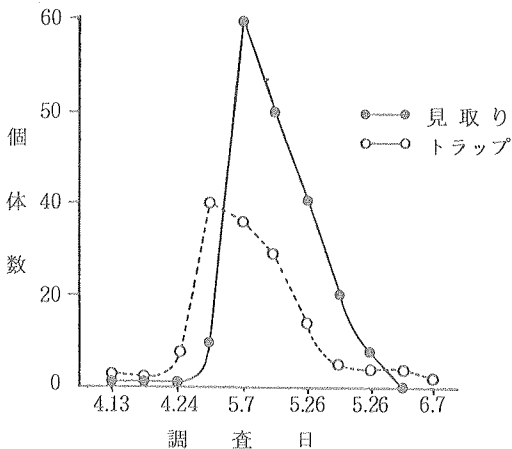
調査枝条数もトラップと同じ6本とした。調査は1984、1985年の2年間おこない、1984年は4月13日～8月6日、1985年は4月6日～8月10日までおこなった。



第2図 クワキジラミ用トラップ

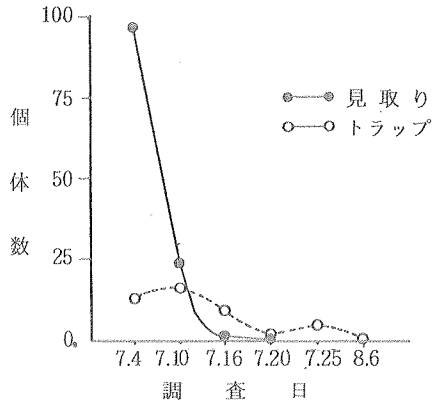
結 果

1984年春における越冬成虫の飛来個体数はトラップを用いた調査では4月24日～5月2日にかけて急激な増加をみた。その後、飛来個体数は徐々に低下し、6月7日を最終に補促されなかった。また、見取り調査では飛来ピークがトラップを用いた区より1週間ほど遅延した(第3図)。



第3図 クワキジラミ越冬成虫の桑園における消長 (1984)

一方、7月14日には多くの若虫が新成虫として羽化しつつあり、6日後の7月10日の見取り調査では急激に個体数が減少していた。さらに、7月16日にはほとんど桑園から姿を消した。見取り調査に比較してトラップを用いた調査では補促される個体数は少なく、その推移も異なった(第4図)。



第4図 クワキジラミの新成虫の桑園からの飛び出し消長 (1984)

1985年は全般に桑害虫の発生が少なく、クワキジラミの越冬個体も少なかった。初見はトラップで4月11日、見取りが4月13日であり、トラップでのピークは4月23日と、前年より1週間早かった。飛来状況は前年に比べ、やや緩やかな推移を示した。また、桑園からの新成虫の飛び出しは前年よりも10日早く、羽化後直ちに桑園外へ飛び去る個体が多く観察された。

考 察

越冬後、クワキジラミの桑園への侵入は短期間におこなわれることが判った。今回の調査は、粘着トラップによる補促および、見取り調査の方法によったが、結果は若干異なった。すなわち、飛来ピークは、トラップによる結果が見取り調査にくらべ、1週間ほど先行した。

クワキジラミの桑園への移動は相等広範囲に、また同時に起きていると予想される。そのために、飛来して来た個体の中にはトラップ付近に定着せず、さらに移動する個体もあったはずである。したがって、それら定着個体以外の移動個体が、本来の飛来ピーク以前に補促され続けた結果、若干見取り調査より先行したものと考えられた。

これに対して新成虫の桑園からの離脱消長では完全にトラップと見取り法とでは結果が異なった。桑園における観察では、羽化個体がただちに寄生枝を離れるため、この状態は見取り調査での結果と良く対応した。この時期、すでに枝はトラップよりはるかに高く伸長しており、クワキジラミが寄生していた部位もトラップより高い位置のものかほとんどであった。この生息部位とトラップの高さの差が捕促虫数の少なさ、さらには正確な離脱消長をとらえることができなかつた一因と考えられた。

クワキジラミの新成虫がほとんど羽化後ただちに桑園外に飛び去ることは、新成虫が桑以外の植物で成熟後越冬するか、あるいは他の寄生植物で世代をさらにくり返して成虫で越冬するなどの可能性が考えられる。新井(1981)¹⁾は桑園周辺での越冬成虫の採集を試み、3月上旬、周辺の針葉樹(主としてスギ)で生息を確認したものの、3月以前の時期にはほとんど採集することはできなかつたと述べている。これらのことから、クワキジラ

ミの越冬場所は本来思われていた桑園周辺ではなく、相等離れた場所で、その間を大規模な移動をおこなっている可能性も十分考えられる。今後、新成虫が桑園を離れた後の生態を追究する場合こうした可能性をも合せて考えていく必要があると思える。

摘 要

クワキジラミ越冬成虫の桑園への飛来消長、の新成虫の桑園からの離脱消長を調査した。その結果、以下の知見を得た。

1. 越冬成虫は短期間に集中的に飛来した。そのピークは4月下旬から5月上旬であった。
2. 新成虫の羽化は7月上旬であり、羽化後ただちに桑園外に離脱した。

引用文献

- 1) 新井裕(1981): 埼玉蚕試報, 54, 57-58.
- 2) 桑山賞(1971): 応動昆, 15, 115-120.
- 3) 横山桐郎(1929): 最新日本養蚕害虫全書, 208-210, 明文堂, 東京.